

特集：みんなで歩んだ みなとまちづくりの20年

ー 浅原正三さん × 網干年明さん × 吉田耕三さん 対談 ー

みなとまちづくりは、平成16年から始まりました。

最初は行政が中心でしたが、県や企業、市民が自然と巻き込まれていき、気がつけば20年近く続く大きな取り組みになりました。

高砂西港の整備や道路の改良といった県の事業は、まちの骨格をつくる大きな役割を果たしました。一方で、市民と一緒に進めた公園整備やまち歩き、触れ合いの場づくりなどは、地域の人の思いが形になった活動でした。

行政が「事業をやりました」と並べるだけでは伝わらない、現場の熱や人の思いが、この20年にはたくさん詰まっています。だからこそ、節目の今、関わってきた人の声を残したい。そんな思いでこの冊子をつくりました。

花と緑がつないだ人の輪と活動の広がり

浅原： 花と緑の活動は、まちづくりの中でも特に“人をつなぐ力”が強い取り組みでした。

県の講座で学んだことがきっかけで、企業の緑化担当を任せられ、工場立地法の届け出や県との協定づくりなど、環境づくりに深く関わるようになりました。その流れでNPO法人を立ち上げ、地域の公園管理や花壇づくりにも取り組むようになりました。

あらい浜風公園の花壇づくりでは、苗を育てるところから始め、文化会館の裏でプランターを並べて水やりをし、季節ごとに植え替えをしていました。重労働でしたが、地域の人々が「きれいになったね」と声をかけてくれると、それだけで疲れが吹き飛びました。

花は誰でも関わりやすく、地域の人々がまちづくりに参加する入口にもなりました。自治会との協力も進み、活動の輪が自然と広がっていきました。

地域を支えてきた人たちと、これからのまちのこと

浅原： 地域の現実、この20年で大きく変わりました。

担い手不足、人口減少、交通の問題、祭りの変化…。どれも避けて通れない課題です。

自治会が高齢化が進み、若い人は仕事で忙しく、ボランティアに割ける時間が減っています。バスの運転手不足や交通の不便さも、生活に直結する問題です。祭りも担ぎ手が減り、運営が難しくなっています。

網干： 行政との関係も、うまくいくときもあれば、思いが伝わらないと感じることもありました。「本当に地域を良くしようと思っているのか」と疑問を抱く場面もありました。

それでも活動を続けてこられたのは、やっぱり“人とのつながり”があったからです。誘われて参加したのがきっかけで、副会長から会長へ、そして連合自治会や産業部会、ウォーターフロント、歴史部会へと役割が広がっていきました。

行政と市民と一緒に動く「協働」の形が求められる今、地域の力をどう次につないでいくかが大きなテーマになっています。

現場で積み重ねてきた記録と、まちに残る思い出

吉田： 花壇づくり、PCB跡地の整備、公園の工事、ホテルの池づくり、祭りの準備…。

現場で積み重ねてきた活動には、どれも“その時その場にいた人にしか分からない記憶”があります。

工事現場や祭りの様子を定点撮影して、DVD やブルーレイにまとめてきたのも、「後から見返したときに、何がどう変わってきたか分かるように」という思いからでした。30 年以上の映像は、地域の貴重な財産です。

祭りは担ぎ手不足や協賛の減少など課題も多いですが、地域の人と一緒に汗をかいて準備してきた経験は、何よりの思い出です。台風の後と一緒に清掃したり、花壇を整えたり、そうした積み重ねが地域のつながりを育ててきました。

記録を残すことは、次の世代に「このまちがどう歩んできたか」を伝える大切な役割を持っています。